

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

思いつきをぶつける場所

【作者名】

biwanosin

【あらすじ】

自分がラノベ読んだりアニメ視たりして思いついたアイデアを、一巻分くらいで書いていくものです。

書きたいけど、たぶん原作何巻も書いていくのが難しい、というものばかりです。

タグは、書きたんに増やしていきます。

第一話

「えっと……どの辺りだったけ、結衣？」

「その角を右に少し行けば分かるって言ってたよ、兄さん」

自転車に二人乗りしながら後ろに乗っている妹に道を聞いて、その通りに進む。

えっと……あ、あれかな。警察の人がいるし。他に人は……いないな、うん。

「すみません、ここにガストレアが？」

「ん、ああ……あんたらは？」

あ、そうか。まずはこっちの立場を言わないといけないか。

「申し訳ありません、片桐民間警備会社所属、プロモーターの滝沢たきざわなげき歎なげきで、こっちが妹の……」

「兄のインシエーターをやっています、滝沢結衣たきざわゆいといいます」

驚いて結衣を見ると、結衣はこっちと目を合わせようとしなかった。

出来ることなら、結衣にはついてきただけの妹ってことにしておいてほしかったんだけど……

「兄妹で民警か。それにしても……民警なんて似合う性格には見えねえぞ」

「よく言われますし、自覚もありますよ。あなたは？」

「ああ、悪いな。多田島だ。で、件のガストレアだが……」

そう言いながらすそばにある建物を見上げたので、つられてそち

らを見ると・・・

「・・・あれが？」

「そうだ。モデル・ゲッコって報告をもらってる」

「ゲッコ・・・？」

「ヤモリのことですよ、兄さん」

なぜうちの妹は当然のように知っているのだろうか・・・と、無駄なことを考えるのはここまでにしておこう。

服の内側に隠してある銃を取り出しながらそんなことを考えて、建物の壁に張り付いているガストレアを見る。

一匹もいるし異常に大きいけど・・・あれ、オスとメスかな？

「どうします、多田島さん。あれがもし交尾中とかだったら。未だ見たことのないガストレアの生態を知ることができるかもしれませんよ？」

「こんな時でもそんなことを言ってられるのか・・・ずいぶんと気楽なもんだな」

「むしろ、現実から目を逸らしているんですよ。僕、序列は十一万二千十五位なんです・・・あれ、ステージですよね？」

「ああ。それでも二匹いるから、報酬ははずませてもらうぜ」

「それは助かります。うち、貧乏なので」

さて、と。まずはどうしようか・・・向こうに気付かれないままいけるなら一番だけど、それは無理だろうし。

「結衣、一匹任せてもいい？」

「当然です。というか、最初一人でやる気でしたよね？後でちょっとお話が・・・」

その先を聞きたくなかったので、ガストレアに向かって銃を発砲す

る。

もちろん、装填されてるのはバラニウム弾。

「じゃあ、今撃った方をよろしく」

「分かりました」

返事を聞いたところで銃をしまい、代わりにバラニウムのコンバットナイフを二本抜く。

隣で結衣も銃を二丁構えたのを確認して、飛び降りてきたガストレアの下に回り込む。

口をあけて跳び下りてくるので、まずそこに向けてナイフを投げ込む。

ガストレアは体の中を直接傷つけられてダメージがひどかったのか、軌道がそれて少し先に落ちた。あー・・・建物が尻尾で壊されてる。これ、僕の責任じゃないよね？

「って、それは後から考えるべきか」

余計なことを言ったん頭から追い出して、ヤモリの上に登って脳がある辺りにナイフを突き刺す。

片手でえぐりながら銃をとり、ふと見ると結衣も似たような体制で二丁の銃を直接脳に打ち込んでいる。妹に先こされちゃったか・・・そう思いながら銃の引き金を引いて、マガジンが空になるまで打ち込んでから銃をしまい、ナイフを引きぬく。

「これ、洗わないとしまえないなあ・・・多田島さん、このあたりに公園とかありますか？」

「あ、ああ。確かすぐそこに・・・後ろ！」

慌てたように言われて振り返ると、僕がやっていたガストレアが起

き上がってきていた。ちょ、あれだけやってもまだ生きてるとか……少しあわてながら多田島さんを突き飛ばし、腕に少し牙を突き立てられて……そこで結衣がガストレアを蹴り飛ばした。

一撃では済まず、まず間違いないで死んでいるところに追撃を加え続けているのもうバラバラになっていて……と、そこで肩に手を置く。

「ストップ、結衣」

息を荒げて振り返った結衣の青い目を真正面から見て、両肩に手を置いて視線を合わせる。

「周りの皆さんがもうドン引きだよ？」

「あ……申し訳ありません、兄さん」

恥ずかしそうに顔を伏せたので頭を少し撫でて、もう一振りのナイフも回収する。

少し走って公園に行き、ガストレアの関係で避難しているのか誰もいないので堂々とナイフを洗ってから多田島さんのところに戻る。

「申し訳ありません、待たせてしまって。インシエーター滝沢結衣とプロモーター滝沢歎。ガストレアを排除しました」

「『苦勞民警の諸君』」

お互いに敬礼をしてから、多田島さんから報酬を受け取る。

中を見てみると……確かに、ステージのガストレア二体分よりも少し多めの報酬が入っていた。

「それにしても、二人ともおとなしそうな顔してんのにえげつない戦い方をするもんだな」

「じっ……ひどいですね」

「いや、たぶんここにいる全員がそう思ってるだろうぜ」

だって・・・あれが一番有効な手だと思うし。さすがにステージ以降とか空を飛べるタイプのガストレアには使わないけど。落ちるのはともかく、落ちてからを見られたらマズイし。

「・・・では、僕はこれで失礼します。また依頼などありましたらこちらまでご連絡のほどを」

「ん、分かった」

名刺だけ渡してから、僕は結衣を乗せて自転車を走らせる。

さて、と。確か買い物リストはこのあたりに・・・

「あ・・・なくなってる」

「元々、買い物のために出たはずなんですけどね。大丈夫ですよ、兄さん。リストは全て覚えていますから」

出来た妹を持つと、こういう時には助かるよね。

「いただきます」

「おう、食べえ食べえ」

もう毎日のことだけど、玉樹さんが作ってくれた夕食をいただいている僕と結衣。

今食卓を囲んでいるのは、僕に結衣、玉樹さんと弓月ちゃん。この民警会社に所属してからもう毎日食事はお世話になってる・・・というか、ここに一部屋借りさせてもらっている。

「本当に、ありがとございませう玉樹さん。僕たちを雇っただけじゃなくて、色々とお世話になってしまいました」

「いいってことよ。家族と一緒にいたいって気持ちは、おれっちにも分かるしな」

「そうそう！あたしも結衣ちゃんと一緒に入れてうれしいし！」

「私もうれしいですよ、弓月さん」

二人が仲良くしているのを見て少し和んでから、ふと思い出してかばんから封筒を取り出す。

「これ、今日倒したガストレアの報酬です。買ってくるよう頼まれたものの代金分は減っていますけど」

「あ……いつも言ってるが、半分はそっちで持ってるっていいんだぜ？」

「そんなにはいりませんよ。僕は学校に行ってるわけでもないですし、食事はここでお世話になっています。最低限、結衣が学校に行けるだけのお金はもう受け取っていますし」

その分は、四月には貯めてある。

そういうわけで、毎回ほんの少しだけ受け取ることができればそれで問題ないのだ。

「何より、居候の身ですからね。家賃くらいは払わせてくださいよ。……こんな力を持つてる僕なんか、」

「待て」

僕の言葉は、玉樹さんに遮られた。

顔をあげてみると……少し、睨まれている。

「その話はするな。もう何回目か分からないが、おれっちゃん弓月は気

にしない」

「・・・本当に、ありがとございます。まさか、僕の力見せても気にされないとは思っていませんでしたよ」

この人、見た目によらずものすごくいい人だ。本当に。

まず間違いなく、初対面で他の人にあれを見せたら、良くて侮蔑の目で見られる。普通なら殺されて、最悪の場合それよりひどい仕打ちを受ける。

と、そこで妹組みの話が聞こえてきた。

「そういえば・・・来客でもありましたか？」

「あつたけど・・・どうして？」

「嗅ぎ覚えのない匂いがしましたので」

嗅ぎ覚えのない、って表現としてはあってるのかな・・・？まあ、言いたいことは分かるけど。

結衣はモデル・ウルフのイニシエーター。匂いには敏感だし。

「ああ、そつだ。おれっちたち、アジユバンドに参加することになった」

「それはまた・・・何かありましたか？」

「モノリスが崩壊するそつだ」

つい箸を落としてしまった。隣では、結衣も使っていた箸を落としている。

「・・・すみません。玉樹さんを疑いたくはないんですけど、それ本当ですか？」

「マジだ」

「マジなんですか・・・」

床はつい昨日掃除した関係でそこそこ綺麗なので、水で軽く洗ってから結衣に渡す。

シンクロした動きで四人が飲み物を飲んでから、話を再開する。

「はぁ・・・相手はどんな感じなんですか？」

「敵は二千体、親玉はアルデバランだそうだ」

今度は着を落とさなかったけど、代わりに絶句した。

なんでこう・・・この二人は厄介事に首を突っ込んでいるのだろうか？

「それで、お前は・・・って、わりい」

「あ・・・いえ。むしろぼくの方こそ、すいません。東京エリアの危機なのに、手も貸せなくて・・・その難易度ですと、あれを使うことになるかもしれないし・・・」

相手が二千体。しかも、親玉がステージのアルデバラン。

死ぬとは思えないけど、それでもあれを使うんじゃ大差ないし。

よっぽど信用できる人の前でもない限り、使えない。

「僕がうじうじしているせいで、結衣にも迷惑をかけてしまっていますし」

「そんなことは、」

「あるよ。結衣だけなら、序列は千番台は固いはずだし・・・でも、アジユバンドに参加するのはなあ・・・」

他のペアと組んでいたら、参加させられていた可能性が高い。

「ま、さすがに参加を強制するつもりはねえよ。してくれるなら、心強いけどな」

「十一万二千二十五位に何言ってるんですか？」

「本当にその順位なら、ステージを二匹相手にして無傷で帰ってこねえよ」

「ってか、この間ステージも倒してなかった？」

あつれー？その話はしてないはずなんだけどな・・・

「会社側に連絡が来ないはずねえだろ。おれっちに直接来た。・・・ってか、社長に何の報告もなしっていつのはどいついつ見だ？」

「兄さん、その話は私も初耳なのですが・・・」

「うちそうさまでした。少し散歩してきますよー」

逃げました。

「はあ・・・逃げるだけ無駄だったなあ・・・」

「当然です。私は狼の因子を持っているんですよ？」

逃げて十分でつかまり、勝手な行動をするのはもう止めないが報告くらいはするように、と二人からお説教を受けた。

その後ろで弓月ちゃんは笑ってたけど・・・はあ、あの光景もう何度目だろう？

「・・・やて、もう寝よつか？」

「そうですね。準備します」

結衣はそう言って自分の目と同じ色のカラーコンタクトを外し、寝間着に着替えてからこちらに来たので長い髪をゆったりとした三つ

編みにしていく。

結衣の銀髪を結び上げながら、今日までのことを思い出す。

僕の体は、普通の人間とも呪われた子供たちとも違う。民警のライセンスは取れたけどそのことでもどこにも所属できなかったところに、仕事で一緒になった玉樹さんは誘ってくれた。

おかげで、こうして自分と同じ銀髪と碧眼を持つ妹と一緒に暮らせている。

「……よし、出来たよ結衣」

「ありがとうございます、お兄ちゃん」

絡まないように結衣の髪もまとめることができたので、一緒に布団に入る。

「そう言えば、今日牙を刺されていましたよね？大丈夫でしたか？」

「ああ……もう塞がったよ」

「ウイルスの方は？」

「そっちも心配ない。……結衣は知ってるでしょ？」

「それはそう、ですが……」

何か言いたげな結衣の頭を、昼より少し雑目に撫でる。

髪が崩れるから、と昼間はあれくらいでやってるけど、結衣はこっちの方が好きだったりする。

「心配しすぎだよ、結衣は。それより、結衣の方は大丈夫？学校とか」「……はい、大丈夫ですよ。あまり学校で弓月さんとは話せませんが、楽しくやれています」

あー……確かに、弓月ちゃん学校ではあんまり人とかかわってないって言ってたな。玉樹さんが。

「それなら、二人とも問題なく暮らせてるってことで」「
」ですね。お互いに安心して、もう寝るとしましょ」

これ以上お互いに詮索しても、お互いに心配させないようにと何も
言わないにきまってる。

そして、結衣が僕に抱きついてきたところで電気を消して、二人で
眠りについた。

第二話

「とか、ついこの間までは考えてたはずなんだけどなあ……」
「いい加減、往生際が悪いですよ兄さん」

今、僕と結衣は三十二号モノリスの辺りに来ている。

人やガストレアの死体がたくさん転がっている中を歩いて行き、戦場へと向かっていく。

こんな都市伝説がある。『新人類創造計画』。

これはガストレア戦争が生んだ、人間兵器を開発するプロジェクトだ。

四賢人と呼ばれる四人が、それぞれの方法で機械化した人間を生み出したプロジェクト。ただ一つ、医者としての道は踏み外さないという誓いを立ててそれぞれが人間兵器を作り出した。

そうして生まれた人間兵器は、一部は民警に。一部は普通の日常を求めていった。

僕が手に入れた情報に乗っているのは、今回玉樹さんが参加しているアジユバンドのリーダーにしてゾディアック・スコープオンを倒した里見蓮太郎。序列剥奪処分を受け、僕たち民警の敵である蛭子影胤。聖天子様暗殺未遂で序列を剥奪されたティナ・スプラウト。

前者二人は、序列三桁台に。最後の一人に至っては二桁にまで達している。

全員が全員、人間のまま人間にはたどり着けない強みに達している。

それが、『新人類創造計画』。ただの都市伝説程度に知っている人は多いだろう。

「たしか、爆発してたのってもう少し先だよな？」

「そのはずですよ。……あ、人がいますよ」

結衣が指差す先には、右手右足のない人が岩の上で倒れていた。……いや、絶望してる？

「あ……ねえ、結衣。あれがアルデバラン？」

「そうですね、兄さん。あれだけの爆発でも死ななかつたんですね」

「へえ……ってことは、再生能力でもあるのかな？何か知っていますか？」

岩の上まで登って、倒れている人に聞いてみる。

あ……この人、里見蓮太郎だ。

「そうだけど、あんたらは……？」

「ん、僕たち？僕は序列十一万二千二十五位、片桐民間警備会社のプロモーター、滝沢歎です」

「同じく、序列十一万二千二十五位、イニシエーターの滝沢結衣です」

「そんなランクじゃ、あいつには……」

「普通ならそうですね。……ところで、新人類創造計画の里見蓮太郎さん。こんな話を聞いたことはありませんか？」

僕はこの間よりも攻撃性に優れた武器を抜いて、アルデバランの方を向く。

まだ再生は終わってないのか……もっ少しくらいなら、話をする時間もあるかな？

「お前、こんな状況で何を言って……」

「新生物創造計画……聞いたこと、ありません？」

首をかしげて尋ねると、目に見えて驚いていた。うん、やっぱり新人類創造計画にかかわってただけあって知ってるんだね。

「それは、都市伝説のはずじゃ……」
「そんなこと、言い始めたら新人類創造計画もそうですよ。それに、よく言っじゃないですか。“火のない所に煙は立たぬ”って」

『新生物創造計画』。新人類創造計画を実行していた四人と同等の天才一人が、一人で実行していた計画。

それは、新たな生物を作り出そうというものだった。そう……人間とガストレアの融合体を。

人間にガストレアウイルスへの対抗因子を植え付け、ガストレア化しない生物兵器を作り出そう、というのが計画の全貌だ。そして、彼女は完璧な対抗因子を完成させた。

だがしかし、ガストレアウイルスに対抗できるだけあってそれ自体も人間には毒としかならない。事実として、その手術を受けた瀕死の人間はことごとく死んでいった。

だがしかし、ほんの何人かだけ死なずに生き残り、人には知られずにガストレアを倒していった人間がいる。

彼らは、ガストレアのウイルスが効かないのをいいことに容赦なく立ち回り、たった一人で新人類創造計画が生み出した人間兵器の倒した以上のガストレアを殺していった。

「では改めて、初めまして里見蓮太郎さん。元陸上自衛隊特殊部隊『新生物創造計画』、顎^{アギト}。滝沢歎です」

「お前が、そんなのか……」

「ええ、そうですね」

次の瞬間、僕の瞳の色は紫へと変化する。

ガストレアや呪われた子供たちと同じ赤色に、僕の元の瞳の色である青が混ざった色に。

「それじゃあ、行こうか結衣。東京エリアを救うために」

「ええ、行きましょーう兄さん」

今日はカラーコンタクトをつけていないので、結衣の瞳も赤色に変わっている。

同じ髪の色、だが異なる瞳の色をした僕たちはゆっくりと歩き、気づいて向かってきたガストレアを片っ端から倒していく。

一撃で脳を潰して、少しでも時間を節約しながら進んで・・・アルデバランが攻撃してきたところで、左右に跳んでよける。

結衣は狼の因子の力で得た脚力や腕力でアルデバランを攻撃している。

僕は少し距離をとってその様子を観察して、驚異の回復能力とやらを見る。

うん、確かにあれは異常だ。でも・・・回復する暇を与えなければ、いけるかな。

「結衣、始めるよー」

「はい、兄さん！」

結衣の返事を聞いたところで、僕は腕に意識を向ける。

ここでアルデバランと戦う以上、服はもうダメになるものだと考える必要があるだろうし、このままでいいか。

そして・・・僕の右腕は、巨大な顎へと変化した。

「それ・・・」

「いたじゃないですか、顎アキトって。そのまんまの意味なんですよ」

そう言いながら腕を振って、飛んできたガストレアに噛みつく。

そのまま噛み砕き、呑みこみ、取り込む。これが、僕の新生物創造計画としての力。

そのまま、たった今とりこんだものを使って一時的に飛び、アルデ

バルンの触手を喰らう。

「どうですか、兄さん？」

「いつも通り、味はないかな。でも・・・うん、ステージでも大丈夫みたい」

そう言いながら、再び迫ってきた触手を喰らい・・・それを合図にして僕と結衣は走り出す。

結衣が迫ってくる触手を蹴り飛ばし、バリニウムの剣や銃でアルデバルンを傷つけていく。

アルデバルンには再生能力があると言っても、相手はガストレアのステージ。

再生の障害も、多少は働いてくれる。

で、僕は・・・ただひたすら、アルデバルンを喰らっていく。

バリニウムの剣で切り裂いてはそれを右手の顎で喰らって、ある程度近づけたら直接食いちぎる。

そうしてひたすら繰り返して・・・アルデバルンが再生を始める前にまた喰らう。

相手は、心臓や脳を切っても死なないガストレア。

それでも・・・再生するだけのものさえなくなるほどにすれば、もう死んでくれるんじゃないかな？

そう考えて、ただただ喰らい続ける。

結衣や僕の刀がバリニウム浸食液で溶けだしたら、僕は右手の顎で。結衣は手刀や足刀で切り裂いていく。

そうして、どれくらい戦っていたらろうか。

アルデバルンの体はもう巨体と呼べるだけのものですからなく、ステージだと言われても信じてしまっただけになっている。

そんなアルデバルンに近づき、右手の顎を振りおろして・・・余す

ところなく、アルデバランを喰らいつくした。

「今回は本当にありがとうございました、滝沢さん」

「気にしないでいいですよ、聖天子さま。どうしてもというのなら、今からでも僕の情報を消してください」

歎は心の底から、聖天子へとそう言った。

「申し訳ありませんが、それはできません。あなたが新生物創造計画の被験者であることはどうにか隠すことができたが、アルデバランをほぼアだけで倒したという事実は、既に広がってしまっているから」

「そう、なんですよね・・・はあ、憂鬱だあ」

歎はそう言いながら隣にいる結衣を見て、その落ち着いた様子をほんの少しでいいから分けてくれと、そう切に願った。

「・・・はあ。式典だけは免除になったんですから、それでよいではないですか」

「うん、まあそれはいいんだけどね。それでも、序列が一気に上がりすぎだと思っし・・・」

今回、アルデバランを倒した功績で僕と結衣の序列は百十七位まで一気に上がった。

おかしくない？何をどうしたら一気に順位が十一万九百八も上がるの？

「・・・本当に、申し訳なく思っています。新生物創造計画については」「別に、気にしなくていいですよ。もう今さらですし」「ですが、私たちがしっかりしていれば・・・あなたは本来、」「もう終わったことです。そして、僕は生きています。それでいいじゃないですか」

歎は聖天子の言葉を遮りながら、結衣の頭をなでていた。

彼らの見た目の特徴・・・銀髪に青い瞳。

ここから推測ができるかもしれないが、彼らは聖天子の遠い、本当に遠い親戚にあたる身だ。

だからこそ、彼女は歎たち二人が今の立場にいることに対して罪悪感を覚えている。が・・・

「僕たちには、そんな立場は重すぎます。ですから、今の立場でいいんですよ」

「・・・そう、なんですな」

「ええ、そうです。結衣もだよな？」

「はい、兄さん。聖天子さま、私たちは本当に気にしていませんし、今の生活が幸せなんです」

結衣の発言で聖天子の顔から緊張が少し抜けたのを見て、歎は立ちあがった。

「では、僕たちはこれで失礼します。また何かあったら、僕たちに対処できる範囲であれば言ってくださいね」

「よろしいのですか？」

「まあ、一応親戚にあたるわけですから。出来ることは、やらせていただきますよ・・・姉さん」

歎が出て行くのを聖天子は驚いた眼で見て、そこに結衣が声をかけ

る。

「あれで兄は、素直じゃないんです。申し訳ありません」

「あ、いえ。私は気にしていませんし・・・」

「そう言っていただけだと助かります。なんにしても、私たちは聖天子さまのことも勝手に家族として認定しましたから。本当に、遠慮なく言ってくださいね？お姉ちゃん」

結衣はそう言つと部屋を出て、兄の後を追っていった。